謡曲《砧》――〈狂気〉の位相

篠原　涼

一　はじめに

能にいわゆる〈物狂〉の〈狂気〉とはいかなるものか。世阿弥（一三六三頃―一四四三頃）は『風姿花伝』で「思ひ故の物狂」をいう。本稿では、世阿弥が「物狂能」と同じく「思ひ故の物狂」を主題化したと目される《砧》（四番目物・執心女物）を取り上げ、その〈狂気〉の位相を窺う。

『申楽談儀』には、《砧》について以下のような記述が見られる。

静成し夜、砧の能の節を聞しに、かやうの能の味はひは、末の世に知人有るまじければ、書き置くも物くさき由、物語せられし也。

《砧》は世阿弥晩年の作。しかし、音阿弥が寛正五年（一四六四）の糺河原勧進猿楽、翌年の仙洞御所の能で舞って以来、室町時代には演能の記録がない。再演されたのは、元禄に入ってからのこととされるが（1）、右は本曲が世阿弥の自信作であったことを伝えている。

二　《砧》の〈思ひ〉、〈物狂〉

〈物狂〉の〈狂気〉については「偽りの狂気」説が通説化している。「能の「物狂」は、彼らが芸能者という資格で行動している。」（2）、「即興的芸人」（3）、「歌舞・物まねを演じる人や旅芸人」（4）といった言及がそれだが、これに異を唱えた大谷節子（二〇〇七）は、世阿弥にとっては「心ノ如ク振舞」う行為、すなわち「極めて人間的な純粋な行為」との認識であったとして、「「情念ニ由」って惹き起こされる、惺悟すること能わぬ人間の精神状態」こそが、物狂能で描かれる〈狂気〉であると指摘している（5）。

伝統的な「憑き物の物狂」だけでなく「思ひ故の物狂」をも主題化する世阿弥は、『風姿花伝』のなかで、「親に別れ、子を尋ね、夫に捨てられ、妻に後るゝ」といった事情によって生じる〈思ひ〉に目を向け、それを〈物狂〉の要因と捉えている。大谷の理解はこれに見合うものだが、では、《砧》はいかなる〈思ひ〉、それ故のどのような〈物狂〉を語っているのか、まずは確認しておく。

《砧》の主題について、石黒吉次郎（一九八九）は「人妻の恋ふる妄執と、その堕地獄」（6）、相良亨（一九九〇）は「地獄におちてもなお抑えきれない夫を慕い恨む恋慕の情」（7）と捉えている。これによれば、《砧》が語る〈思ひ〉〈物狂〉は、夫への「恋慕」「怨恨」と「妄執」に関わるということになる。

〈思ひ〉

前場が描き出すのは〈思ひ〉だが、それは以下のシテの科白によって語られている。

シテ われは忘れぬ音を泣きて、袖にあまれる涙の雨の、晴れ間稀なる心かな。（第二段、サシ）

シテ 思ひやれげには都の花盛り、慰み多き折々にだに、憂きは心の習ひぞかし。（第三段、問答）

地謡 鄙の住まひに秋の暮、人目も草もかれがれの、契りも絶え果てぬ、何を頼まん身の行方。（第三段、下ゲ歌）

地謡 思ひ出は身に残り、昔は変り跡もなし。げにや偽りの、なき世なりせばいかばかり、人の言の葉うれしからん、おろかの心やな、おろかなりける頼みかな。（第三段、上ゲ歌）

シテ げにやわが身の憂きままに、古言の思ひ出でられて候ふぞや。（第四段、問答）

シテ わらはも思ひや慰むと、とてもさびしき呉織、綾の衣を砧に打ちて、心を慰まばやと思ひ候。（第四段、問答）

シテ 馴れて臥すまの床の上、ツレ 涙片敷くさ莚に、シテ **思ひを述ぶる便り**ぞと、ツレ 夕霧立ち寄り主従ともに、シテ 恨みの砧打つとかや。（第五段、掛ケ合）

シテ 音づれの、稀なる中の秋風に、地謡 憂きを知らする夕べかな。（第五段、一セイ）

地謡 今の砧の声添へて、君がそなたに吹けや風、あまりに吹きて松風よ、わが心通ひて人に見ゆならば、その夢破るな。破れて後はこの衣、誰か来ても訪ふべき。来て訪ふならばいつまでも、衣は裁ちもへなん。夏衣、薄き契りはいまはしや。（第六段、上ゲ歌）

地謡 かの七夕の契りには、一夜ばかりの狩衣、天の川波立ち隔て、逢瀬かひなき浮舟の、梶の葉もろき露涙、二つの袖やしをるらん。水陰草ならば、波打ち寄せようたかた。（第六段、（クセ））

シテ 文月七日の暁や、地謡 八月九月、げに正に長き夜、千声万声の、憂きを人に知らせばや。月の色風の気色、影に置く霜までも、心凄き折節に、砧の音夜嵐、悲しみの声虫の音、交りて落つる露涙、ほろほろはらはらはらと、いづれ砧の音やらん。（第六段、（クセ））

「三年」の別離を経て侍女・夕霧の伝言に「この年の暮には必ず下るべきよし」の報を得ながらも、「晴れ間」なく「憂し」「さびし」「悲し」の情（傍線部）に沈みつつ、「頼み」と「恨み」の交錯（波線部）の中で「思い出」を生き（二重傍線部）、「薄き契り」にすがり、砧に「慰み」を求めるシテ。夫への恋慕の情と「言の葉」への不信、心変わりの疑念の〈思ひ〉を「述（延）ぶる」砧の音（ゴシック）には、「わが心通ひて人に見ゆ」、また「憂きを人に知らせばや」との期待が込められてもいた。

「夏衣」「七夕」「文月七日」「八月九月」の語の連続は、帰郷の報を得てからの時間の経過を語るものであろう。そして秋の暮れ、そこに届いたのが「都より御使」（アイ）（8）、発されたのが侍女夕霧の「いかに申し候。殿はこの秋も御下りあるまじきにて候。」の言葉だった。

シテ 恨めしやせめては年の暮をこそ、偽りながら待ちつるに、さてはやまことに変り果て給ふぞや。地謡 思はじと、思ふ心も弱るかな。地謡 声も枯野の虫の音の、乱るる草の花心、風狂じたる心地して、病の床に臥し沈み、つひに空しくなりにけり、つひに空しくなりにけり。（第七段、クドキ・下ゲ歌・上ゲ歌）

帰郷延期の報によって妻は「狂じ」、死へと向かう。前場末尾の右

の科白が後場〈物狂〉への端緒を開くわけだが、それはシテの〈思ひ〉の極点を語るものでもあった。

天野文雄（二〇一一）は「偽りながら待ちつるに」を従来の解釈である「夫の言葉を偽りと思いながら」ではなく、「自分の心を偽りながら（＝ごまかしながら）」と解すことを提案する（9）。「さてはまことに変り果て給ふぞや。」――偽っていたのは夫への不信感（「言葉への不信」「心変わりの疑念」）にほかならない。「思はじと、思ふ心も弱るかな。」――自らを恋慕の情故に偽り続ける意力の衰耗が招き寄せる絶望。後場の〈物狂〉は、「恨めしや」の声をともなうこの絶望の〈思ひ〉の果てに発現する。

かくして《砧》のシテの〈思ひ〉は、夫への「恋慕」「怨恨」でありながら、大谷のいう「極めて人間的な純粋な行為」、「「情念ニ由」って惹き起こされる」「人間の精神状態」＝絶望として、濃密に語られている。

〈物狂〉

シテの〈物狂〉を描き出す後場は、アイの「御歎きは限りなく候へども、とても返らぬ道になり果て給ひて候ふ間、せめて梓に御掛けなされ、今はの時まで御手馴ありし、砧を御手向あり、その後法華経をもつて、御弔ひあらうずるとの御事」との説明を承け、芦屋の某（ワキ）が帰郷したところから始まる。弔いの場に招かれて梓弓の末筈に宿る妻の霊。後シテの〈物狂〉は、前場末段の「恨めしや」を主情として、第一〇段では「因果の妄執」への、第一一段では「執心の面影」への慨嘆をもって演じられていく。

第一〇段は、絶望の果てに冥途に至り、「うたかたの、あはれはかなき身の行方」を嘆くシテの、夫の催す法華読誦供養のなかで業苦に身もだえる姿を映し出す。

生者の弔いたる尽善尽美の法会の「花」「燈」は死者に「娑婆の春をあらはし」「真如の秋の月を見する」（10）――「さりながら」（11）、冥途の「われ」は「邪淫の業」「報ひの罪」をもって獄卒の呵責に苦しみ、しかもなお「因果の妄執」に囚われたままである。手向けられた「今はの時まで御手馴ありし、砧」は、冥府においては「獄卒阿防羅刹の、笞の数の隙もなく、打てや打てやの報ひの砧」だった。もって生前の所業を「恨めしかりける」と後悔しながらも、「思ひの涙」は「砧」にかかり、「涙はかへって、火炎となって」「胸の煙の炎」をかき立てる。そしてそれがまた、阿防羅刹の「呵責の声」を高くする。「恐ろしや」。しかし、「妄執」はその恐怖のなかでも収まることはない。ここに演じられているのは、まさしく「惺悟すること能わぬ人間の精神状態」としての〈物狂〉であろう。

第一一段は、その後シテが「思ひ夫」への「執心」と「怨情」に引き裂かれる姿を描き出す。

「火宅の門を出でざれば、廻り廻れども、生死の海は離るまじや、あぢきなの憂き世や」。断ちがたい「妄執」に「身の行方」を任せ、成仏解脱の法会の庭に背を向けるシテ。しかしなお「（冥途に）帰りかねて」、「思ひ夫」との「二世と契りてもなほ、末の松山千代までとかけし頼み」の昔日に引き戻されていく。「執心の面影」。けれども現身の「思ひ夫」は「夜寒の衣、現（打つ）とも、夢ともせめて」「思ひ知らず」、「頼み」を「あだ波」とした「大嘘鳥」。そこで零れ落ちるのは「そもかかる人の心か」「恨めしや」の慨嘆ばかりである。「執心」が募らせる「怨情」。ここに演じられているのもまた、「惺悟すること能わぬ人間の精神状態」としての〈物狂〉である。

「思はじと、思ふ心も弱る」シテを「恨めしや」の声とともに「狂じたる心地」へと誘う絶望の〈思ひ〉。その「恨めし」の情念は、「因

果の妄執」に身を委ね、六道輪廻の決定を「憂き世」として身に独り引き受けるなかで、なお立ち上がる昔日の「契り」への「執心」故の「思ひ夫」への「怨情」として募っていく。《砧》の「思ひ故の物狂」は、現世と冥界の狭間で宙吊りになりながら「執心」と「怨情」に引き裂かれて「惺悟すること能わぬ」後シテの、「因果の妄執」の〈狂気〉として差し出されている。

三　救済としての〈狂気〉―「砧」の修辞的意味

こうして《砧》は、世阿弥が「物狂能」と同じく「思ひ故の物狂」を主題化した作品としてあり、その〈狂気〉の内実は「妄執」にあるが、本作は、見てきた後場の〈物狂〉の果てに、そのシテの「成仏」を語る次の地謡によって閉じられている。

地謡　法華読誦の力にて、法華読誦の力にて、幽霊まさに成仏の、道明らかになりにけり。これも思へばかりそめに、打ちし砧の声のうち、開くる法の花心、菩提の種となりにけり、菩提の種となりにけり。（第一二段、キリ）

ワキの供養によるシテの「宗教的救済」（12）をもって曲を閉じるのは能の常套だが、本作に特徴的なのは、生前に打った「砧の声」のうちに「菩提の種」としての「開くる法の花心」があったとしている点であろう（13）。見たとおり、「砧」は後場では「獄卒阿防羅刹の、笞の数の隙もなく、打てや打てやの報ひの砧」だった。「邪淫の業」の「報ひ」（獄卒呵責）の種＝「砧」＝「菩提の種」。そこには、「煩悩即菩提の実現」（14）というばかりではなく、このなじみのスキーマを「砧」モティーフの両義性に即して掘り下げていく趣向もあるのであろう。本節では、本作の「砧」の声を辿りつつその趣向を確かめ、「砧」を機縁に発現した〈物狂〉の、煩悩と菩提を媒介する〈狂気〉の位相を探ってみたい。

ところで、「物狂能」において、《班女》では「扇」、《桜川》では「桜」、《花筐》では「花筐」が主要なモティーフとなっているが、これらの〝もの〟は単に作中の素材として用いられているのではない。C・ビエ／C・トリオー著『演劇学の教科書』は、演劇空間では「舞台上に置かれた事物や身体」が「現実からはみ出して、現実を単に模倣する役割から逸脱」し、「現実の単なる模倣以上のなにかを示せるようになる」と指摘する。そして、「ドラマ（劇）の空間はこうして、純粋に想像の空間（たとえばある人物の心的活動）、夢の空間、象徴的な空間、造形的な空間などを表象することができる」という。「修辞的な働きをするイメージ」「特定の記号体系」としての「小道具」（15）＝〝もの〟。《班女》の「扇」でいうならば、「逢ふ」の意味や「秋／風／便り／夕暮」のイメージ連関、また漢詩から和歌へと続く班婕妤の故事との繋がりが、「扇」の修辞的意味として拡がっていく。

《砧》も同様で、「砧」や砧を打つ行為である「擣衣」もまた、「現実を模倣する役割から逸脱」して「修辞的な働きをするイメージ」を表象する。「砧」の両義性はこれに関わるが、では本作で「砧」はいかなる修辞的意味を担い、どのようなイメージを喚起して「人物の心的活動」を表象し、「煩悩即菩提」のテーゼの掘り下げに参与しているのか。以下、場面に即して考察する。

＊

まず第四段で妻の耳に砧の音が聞こえてくる場面。

シテ

あら不思議や、何やらんあなたに当つて物音の聞え候、あれは何にてあるぞ。（第四段、問答）

この場面について、里井陸朗（一九七九）は、

今までは何げなくきすごしていた砧の音が特別の意味とひびきをもって耳朶を打った（16）。

とし、稲田秀雄（一九八四）は里井論を受ける形で、

「わが身」の憂きことを深く思い屈したこの時点におけるシテの心情とたまたま聞こえてきた砧の音とが出会って始めて、シテに思いもよらぬあらたな意味を知らしめるのである（17）。

と述べる。ここで言われる「特別な意味」「あらたな意味」とは、和歌世界で醸成されてきた「砧」（砧を打つ行為、音・声）の「修辞的な働きをするイメージ」のことであろう。

増田欣（一九六七）によれば、「擣衣」が歌合の題として出されるのは、永承四（一〇四九）年「後冷泉院御時歌合」が早く、「擣衣」題の確立は一一世紀半ば頃のことである。勅撰集では『後拾遺』に収められる三首が最初であるが、『千載』『詞花』には「擣衣」歌は撰ばれず、『千載』以後の歌集に多く詠まれ、『新古今』に至って和歌における「擣衣」のイメージは確立していく（18）。

『千載』（五首）、『新古今』（一二首）の和歌を見るといくつかの特徴が指摘できる。第一に、砧が視覚的ではなく聴覚的に認識されるもの（音・声）であるということであり、さらにはその音を、砧を打つ本人ではなく、むしろ第三者が聴き、打つ人物の心情が推量的に詠まれることが多い。第二に、砧を打つという行為のもつ意味性である。これは、漢詩における「擣衣」題の変遷にも関わるが（19）、元来、「擣衣」題が漢詩の題であったことから、「雁の飛来によって辺境の降霜を想い寒衣を擣つという六朝詩以来の類型」（20）の影響を受け、「夫を待つ妻」の異郷の夫へ向けた恋慕・怨恨の情が込められる。例えば、「たがためにいかにうてばかから衣千たび八千たび声のうらむる（千載・秋歌下・三四一・藤原基俊）」や「秋とだにわすれんと思ふ月かげをさもあやにくにうつ衣かな（新古今・秋歌下・四八〇・藤原定家）」など、恋慕の情を託して打つ砧の延々と続く音は、第三者によって怨恨の情をも聞き取られることになる。第三は「月／夜／風／秋／露／雁／霜」などの語と結びつき、秋の夜長の寂寥や哀愁を喚起するという点である（21）。

《砧》の前シテが里人の打つ砧の音を聞いたときの「特別な意味」「あらたな意味」とは、このような和歌世界で形成された「砧」の修辞的意味のことである。シテは、こうした三種にわたる修辞的意味を孕んだ砧の音と出会うことで「里人」の情念に同調し、以後、〈物狂〉へと至る情念世界を「砧」の修辞的意味に即して駆動させていく。それは、前節引用の詞章に見られる「恨みの砧」（第五段、掛ケ合）、「月の色風の気色、影に置く霜までも、心凄き折節に、砧の音夜嵐、悲しみの声虫の音、交りて落つる露涙、ほろほろはらはらはらと、いづれ砧の音やらん。」（第六段、（クセ））などに明らかである。金井清光（一九六九）はこれらの「修辞的な働きをするイメージ」によって表象される情念世界を次のように総括して説明している。

聞き慣れているはずの砧の音さえ今は何なのかわからないほど

心が乱れていると解すべきである。したがって次の砧の段は物狂能におけるシテの狂乱に相当するものとみなすことができる（22）。

前場における「思ひ」の演出にも描き出される〈物狂〉の〈狂気〉。それは恋慕・怨恨の情に由来するものだが、それ故、この〈狂気〉は「煩悩」の具体を「砧」の修辞的意味に即して掘り下げるところに見出だされた情念の形と見なすことができるだろう。

＊

さて、「里人」の打つ砧の音を耳にした前シテは、そこで「古事（蘇武故事）」を想起することになる。

シテ　唐土に蘇武といつし者、胡国とやらんに捨て置かれしに、古里に留め置きし妻や子の、夜寒の寝覚を思ひやり、高楼に上って砧を打つ。志の末通りけるか、万里の外なる蘇武が旅寝に、故郷の砧聞こえけり。わらはも思ひや慰むと、とてもさびしき呉織、綾の衣を砧に打ちて、心を慰まばやと思ひ候（第四段、問答）

『漢書』「蘇武伝」や『平家物語』巻二「蘇武」によって広く知られている「蘇武雁書」譚は、《砧》後場第一一段でも「蘇武が旅雁に文を付け、万里の南国に至りしも、契りの深き志、浅からざりしゆゑぞかし。」の地謡に引かれているが、ここには蘇武ではなくその妻子の行為としての「夜寒の寝覚を思ひやり、高楼に上って砧を打つ。」が語られている。同類話が日蓮遺文に見られることは稲田秀雄（一九八四）等に指摘があるが（23）、シテにあえてこの故事を語らせている点は、「修辞的な働きをするイメージ」にとって重要である。

稲田は、この蘇武妻子故事の語りを「女性の側の発想」によるものとした上で、この故事を想起するシテに、自らもその蘇武の妻たらんとする、「断絶した二つの時空をつなぎとめようとする交流の試み」を読み取っている。

それが「試み」だったことは、引用後半の「わらはも思ひや慰むと、とてもさびしき呉織、綾の衣を砧に打ちて、心を慰まばやと思ひ候」によっても知られる。「里人」に同調したシテは、「砧」を介して蘇武妻子故事を想起し、更なる同期を故事と果たして「思ひ夫」の「旅寝に、故郷の砧聞こえ」て「志の末通」る事態を夢想する。けれども、「試み」としての「慰め」の夢想はやがて肥大化し、故事の再現が自らの現実に求められていくことになる。

シテ　いざいざ砧打たんとて、馴れて臥すまの床の上、……　思ひを述ぶる便りぞと、……　恨みの砧打つとかや。（第五段、掛ケ合）

地謡　衣に落つる松の声、夜寒を風や知らすらん。（第五段、次第）

シテ　音づれの、稀なる中の秋風に、地謡　憂きを知らする夕べかな。

シテ　遠里人も眺むらん。（第五段、一セイ）

シテ　面白の折からや、頃しも秋の夕つ方、地謡　牡鹿の聲も心凄く、見ぬ山風を送り来て、梢はいづれ一葉散る、空すさまじき月影の、軒の忍にうつろひて、シテ　露の玉垂れかかる身の、地謡　思ひを述ぶる夜すがらかな。（第六段、サシ）

地謡　蘇武が旅寝は北の国、これは東の空なれば、西より来たる秋風の、吹き送れと、間遠の衣打たうよ。……　今の砧の声添へて、君がそなたに吹けや風。あまりに吹きて松風よ、我が心通ひて人に見ゆならば、その夢破るな。破れて後はこの衣、誰か来ても訪ふべき。来て訪ふならばいつまでも、衣は裁ちも替へなん。夏衣、薄

き契りはいまはしや、君が命は長き夜の、月にはとても寝られぬに、いざいざ衣打たうよ。（第六段、歌・上ゲ歌）

地謡　八月九月、げに正に長き夜、千声万声の、憂きを人に知らせばや。月の色風の気色、影に置く霜までも、心凄き折節に、砧の音夜嵐、悲しみの声虫の音、交りて落つる露涙、ほろほろはらはらはらと、いづれ砧の音やらん。（第六段、（クセ））

「思ひをのぶる（述・延）」「慰め」の砧打ちは、やがて「夜寒」「憂き」の伝達、「遠里人」との交感、その夢中への自らの現れ、待望の帰郷への期待へと膨らんでいく。そこに紛れ込む「映（移）ろひ」、「（夢）破れ」、不帰郷、「薄き契り」への不安。その交錯の中で、恋慕の情に安寧を祈りつつも「憂き」に耐えきれず洩れる涙。蘇武妻子故事に関わる「砧」の修辞的意味は、こうして恋慕・怨恨の情に由来する〈物狂〉の〈狂気〉の事態を描き出す。この〈狂気〉もまた、「煩悩」の具体を「砧」の修辞的意味に即して掘り下げるところに見出だされた情念の形と見なすことができるだろう。

＊

「思ひ故の物狂」の「思ひ」を演出する前場は、「砧」の和歌世界・漢故事に関わる修辞的意味を介して恋慕・怨恨の「煩悩」の、その情念の形を〈狂気〉として語り出す。そして後場では、前場末段の絶望を承けて、現世と冥界の狭間で宙吊りになりながら「因果の妄執」に身を任せ「執心」と「怨情」に引き裂かれて「惺悟すること能わぬ」後シテの、その「煩悩」の情念の究極の形が〈狂気〉として演じられる。

「煩悩即菩提」――、「煩悩」を「菩提」の機縁であるとして両者の不二相即を説くこのテーゼは、しかし、真如の現れとしての「煩悩」を前提とする。その意味で、「砧」の修辞的意味を通じて人の情念の究極の形を〈狂気〉として、しかもそれを「極めて人間的な純粋な行為」として演出した本作は、「煩悩」を真如の現れとして描き出したものと評せよう。「煩悩即菩提」は知顗（五三八―五九七）『法華玄義』の説くところ。「法華読誦の力」で「幽霊まさに成仏の、道明らかに」なったのも故なしとしない。真如としての〈狂気〉。それは「煩悩即菩提」のテーゼにおいては「成仏」（救済）の要件を構成する位相にある。

ただし、この「成仏」には、「砧」をめぐるもう一つの修辞的意味も介在していたようである。

『釈氏要覧』の「犍椎」の項には「鐘磬、石板、木板、木魚、砧・搥」が列挙されている（24）。これらは「聲有て能く衆を集る」ものだが、『大比丘三千威儀』には「都摩波利犍椎有五事。一者當會。二者常會讀經。三者布薩。四者會僧飯。五者一切非常。」（25）とある。注意されるのは「布薩」において用いられる点である。布薩とは「半月に一度、定められた地域〈結界〉にいる比丘達が集まって、波羅提木叉（＝戒本）を誦して自省する集会」（26）のことだが、『増一阿含経』にも「犍椎を撃て。然る所以は、今七月十五日、是れ、受・歳の日なればなり」（27）とあって、「砧」が懺悔の儀に関わっていることが確かめられる。鎌倉時代後期の曹洞宗の僧侶瑩山紹瑾（一二六八―一三二五）の著した『瑩山清規』の月中行事「菩薩戒布薩式」にも、「衆當一心念布薩。願上中下座各次第如法受籌鳴槌。」（28）などとあり、自省・懺悔の布薩は槌砧の音の中で進行しているのである。

また、智顗『摩訶止観』（巻六下）には、

天子聞玄、悟無生忍。是二大士、槌砧更扣。令難悟者悟難悟法。

天子玄を聞きて、無生忍を悟る。是二大士、槌砧更に扣いて、悟り難き者をして悟り難き法を悟らしむ。（29）

の文言があり、知顗『法華玄義』を論じた荊渓湛然（七一一―七八二）『法華玄義釈籤』の「十不二門」について、四明知礼（九六〇―一〇二八）が注釈を加えた『十不二門指要鈔』には、次の一節がある。

今更自立一譬、雙明兩重能所。如器諸淳朴、豈單用槌、而無砧邪。故知、槌砧自分能所。若望淳朴、皆屬能也。

今、更に自ら一の譬を立てて雙べて両重の能所を明さん。諸の淳朴を器とするが如き、豈、単に槌を用って而も砧無からん耶。故に知んぬ、槌と砧と自ら能所を分つに、若し淳朴に望むれば皆能に属するなり。（30）

これは、十乗観法の第一に位置づく「観不思議境」の「両重能所説」を説明した部分であるが、その喩えに「槌砧」が用いられている。「両重の能所」とは、「槌（＝観）」「砧＝（不思議）」「淳朴（＝境）」と対応する「観不思議境」について、「槌（＝観）」が「砧（＝不思議）」に対すれば「槌」が能、「砧」が所となり、また、「槌砧（＝観不思議）」が「淳朴（＝境）」に対すれば「槌砧」が能、「淳朴」が所となるという二重の能所関係をいう。「淳朴」とは「未だ治せざる素材」（31）であり、ここでは「一念の妄心に喩」（32）えられている。そして、二重能所においては、「槌砧」が一つの「能」となって「淳朴」＝「一念の妄心」を治し、器（法器）となすというのである。

池田魯参（一九七八）は、「十境（陰入界境・煩悩境・病患境・業相境・魔事境・禅定境・諸見境・上慢境・二乗境・菩薩境）として現われる、転変万化してあるこの「一念心」を原点にすえて、この現実の生が不思議の境（三諦）と観成されてある（三観）ことが、天台観心の基本形である」（33）とする。「転変万化してある「一念心」＝「迷妄」＝「現実の生」＝真如の「観心」は「煩悩即菩提」のテーゼに関わる。そして、その「一念心」＝迷妄を治するのが「槌砧」である。それは《砧》が描く「煩悩即菩提」の物語に重なる。

本作においては、「砧」打ちによって嵩じた情念こそが後場第一〇段で「邪淫の業」として断罪される「妄心」そのものであった。つまり、「煩悩」の表象が「砧の音」だったわけだが、その「砧の音」（「槌砧」）は「一念心」＝迷妄＝妄執＝「煩悩」退治の宗教的な修辞的意味をも担っていた。すなわち、シテの「煩悩」を増長させた「砧」打ちは、そのまま（即）迷妄退治＝「菩提」への「砧」打ちでもあったのである。「これも思へばかりそめに、打ちし砧の声のうち、開くる法の花心、菩提の種となりにけり。」とはこれをいうのであろうか。となれば、それを媒介した「極めて人間的な純粋な行為」としての〈狂気〉、人の情念の究極の形を「現実の生」（真如）として描き出した〈狂気〉は、いわば救済としての〈狂気〉の位相にあることになる。

四　おわりに―美としての狂気

こうして、「物狂能」と同様に「思ひ故の物狂」を主題化した世阿弥作能《砧》は、「砧」の修辞的意味を展開させて「煩悩即菩提」のテーゼを掘り下げた曲としてある。そしてその〈物狂〉の〈狂気〉は、「現実の生」における情念の究極の形を象ったものであり、それ故に真如として菩提への器、救済への道を開くものであった。

救済としての〈狂気〉――、能にいわゆる〈物狂〉の〈狂気〉の位相をさぐる本稿は、これを一先ずの結論とするが、世阿弥の発言を伝

える『拾玉得花』には、〈物狂〉についての次のような記述がある。

物狂なんどの事は、恥をさらし、人目を知らぬ事なれば、是を当道の賦物に入べき事はなけれ共、猿楽事とは是なり。女なんどは、しとやかに、人目を忍ぶものなれば、見聞にさのみ見所なきに、物狂になぞらへて、舞を舞い、歌を謡いて狂言すれば、もとよりみやびたる女姿に、花を散らし、色香をほどこす見風、是又なによりも面白き風姿也。然者、この位を得たる為手は、上花なるべし。是、面白き我意分也。

「猿楽事」としての「みやびたる女姿」の〈物狂〉に見出だされる「花を散らし、色香をほどこす見風」。世阿弥はこれを「なによりも面白き風姿」と評している。

美としての〈狂気〉――、「現実の生」における情念の究極の形を象る〈狂気〉は、演劇空間においては、常は「しとやかに、人目を忍ぶ」「女」なるものの「極めて人間的な純粋な行為」として、「上花」の美の「見風」「風姿」をなすという。このもう一つの〈物狂〉の〈狂気〉こそが演劇としての能にとっては重要なのであろうが、その位相については後考を期すこととしたい。

注

1　表章「〈砧〉の能の廃絶と中興」(『観世』四五巻一〇号、一九七九)。

2　小山弘志／佐藤健一郎校注・訳『新編日本古典文学全集　謡曲集（二）』「百万」頭注、二二頁。

3　香西精『能謡新考―世阿弥に照らす―』「Ⅱ作品研究　桜川」(檜書店、一九七二)、二五一頁。

4　表章／加藤周一校注『世阿弥　禅竹』(日本思想大系新装版「芸の思想・道の思想一」)(岩波書店、一九九五)、二三頁。

5　大谷節子『世阿弥の中世』(岩波書店、二〇〇七)、二一三―二一四頁。

6　石黒吉次郎「謡曲「砧」と世阿弥」(『日本文学』三八巻六号、一九八九)、二二頁。

7　相良亨『世阿弥の宇宙』(ぺりかん社、一九九〇)、一二一―一二二頁。

8　古本系には使者が到着したという詞章はない。また、現行曲では第七段問答部分に、金剛流は「ただ今都より御使ひ下り」、上掛系（観世・宝生）では「都より人の参りて候ふが」とある。現行曲の間狂言詞章には古本系本文への解釈が作用したとみて、ここでは「都より御使」を補った。

9　天野文雄「世阿弥の《砧》を読み解く」(『おもて』一一〇号、二〇一一)、七頁。

10　瞿曇法智譯『佛爲首迦長者説業報差別經』には「奉施燈明得十種功德」として以下を挙げている。「若有衆生。奉施燈明。得十種功德。一者照世如燈。二者隨所生處。肉眼不壞。三者得於天眼。四者於善惡法。得善智慧。五者除滅大闇。六者得智慧明。七者流轉世間。常不在於黑闇之處。八者具大福報。九者命終生天。十者速證涅槃。是名施燈明得十種功德。」(SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース 2012 版・No. 0080)

11　謡曲において対比における強調はよく見られる。第二段［サシ］では「鴛鴦の衾の下」「比目の枕の上」との対比で「妹背の中」が述べられ、さらに「疎き妹背の中」とすることで親疎の対比が用いられている。

12　金忠永「『砧』考―シテ像造型における現在能・夢幻能形式の継承・止揚の方向―」(『文学研究論集』一一号、一九九四)。二五一頁以下。

13　金忠永、注11前掲論文、二四一―二四二頁。

14　金忠永、注11前掲論文、二四二頁。金は、本作の煩悩即菩提の実現を「おのれの想念を超えた救済の構造」と捉え（二四二頁）、前シテの「おのれの妄執のすべてを、「月影」（＝真如の月）に向って吐き尽くそうとする姿勢」は「「真如の月」への懺悔といった宗教的所作」であるとして、そこにシテ救済の要因を読み取り（二五一頁）、「砧」について以下のように述べている。

この「砧の聲」とは、前場で考察してきたとおり、おのれの妄執のすべてを「月影」（＝真如の月）に向って赤裸々に訴えかけようとし、砧を打ちつつ憂き心情を吐き出したその声に他なら無い。（二四二頁）

15　C・ビエ／C・トリオー著、佐伯隆幸 日本語版監修『演劇学の教科書 Qu'est-ce que le théâtre?』(国書刊行会、二〇〇九)、一七九頁。

16 里井陸朗『謡曲百選（上）』（笠間書院、一九七九）、一七六頁。
17 稲田秀雄「能「砧」の修辞と構想―故事引用の方法及び女のドラマとしての視点―」（『同志社国文学』二五号、一九八四）、五頁。
18 増田欣「擣衣の詩歌―その題材史的考察―」（『富山大学教育学部紀要』一五号、一九六七）、六〇―六二頁。「擣衣」歌は、千載五首、新古今一二首、新勅撰一〇首、続後撰一五首、続古今一三首、続拾遺九首、新後撰一七首、玉葉一二首、続千載二二首、続後拾遺一五首、風雅四首、新千載一四首、新後拾遺一二首、新続古今一七首ある。
19 李哲権「衣うつ音―「砧」の比較文化的研究―」（『比較文學研究』六四号、一九九三）に詳しい。
20 増田欣、注17前掲論文、六二頁。
21 増田欣、注17前掲論文、六二―六三頁。『千載』では「礎の音のもつ「艶」と「寂」とが両つながら表現の上に定着している」といい、『新古今』では「荒涼寒苦の気味をただよわせる」「凄涼な或は荒涼な歌」と指摘し、「千載集・新古今集の時代に、ひえ・さびの中世的理念を象徴するものとして定着しきるのである」と述べている。
22 金井清光『能の研究』（桜楓社、一九六九）、四七〇頁。
23 稲田秀雄、注17前掲論文、七頁。なお、今成元昭『平家物語流伝考』（風間書房、一九八〇）、佐伯真一「平家物語蘇武談の成立と展開―恩愛と持説と―」（『国語と国文学』五五巻四号、一九七八）、参照。
24 蔵中進・蔵中しのぶ編『寛永十年版釈氏要覧：本文と索引』（和泉書院、一九九〇）。
25 安世高訳。SAT 大正新脩大蔵經テキストデータベース 2012 版・No. 1470。
26 中村元、他編『岩波仏教辞典』（岩波書店、一九八九）。
27 瞿曇僧伽提婆訳。SAT 大正新脩大蔵經テキストデータベース 2012 版・No. 125。なお、「受歳」は「夏安居の最後の日（七月一五日）に、集会した僧が安居中の罪過の有無を問い、反省懺悔しあう作法」のこと（石田瑞麿『例文仏教語大辞典』小学館、一九九七）。
28 瑩山紹瑾撰。SAT 大正新脩大蔵經テキストデータベース 2012 版・No. 2589。
29 智顗説。SAT 大正新脩大蔵經テキストデータベース 2012 版・No. 1911。釈文は昭和新纂國譯大藏經《宗典部第十三巻》『摩訶止觀』（大法輪閣、二〇〇九）による。
30 國譯一切經 和漢撰述五七 諸宗部一四『十不二門指要鈔』（大東出版社、一九三六）、一四〇頁。
31 注29前掲書、一四〇頁、注六九。
32 注29前掲書、一四〇頁、注六九。
33 池田魯参「十不二の範疇論（一）―『指要鈔』を通路として―」（『駒澤大學佛教學部研究紀要』三六号、一九七八）、一〇九―一一〇頁。

＊世阿弥伝書類については日本思想大系新装版『世阿弥・禅竹』（表章／加藤周一校注、岩波書店、一九九五）、《砧》本文については新編日本古典文学全集『謡曲集（二）』（小山弘志／佐藤健一郎校注・訳、小学館、一九九八）を用いた。

また、『千載和歌集』は新日本古典文学大系『千載和歌集』（片野達郎／松野陽一校注、岩波書店、一九九三）、『新古今和歌集』は新日本古典文学大系『新古今和歌集』（田中裕／赤瀬信吾校注、岩波書店、一九九二）の本文に依拠した。

（広島大学大学院博士課程前期二年）